

## 4歳児を対象としたオンライン表現活動の実践 ～オリジナルストーリーで表現する食の大切さ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

青木真郁・伊崎大雅・大浦佐知・川上莉奈・  
木下・古賀葉月・猿渡愛華・嶋田香凜・  
塚本萌杏・友清カレン・中川沙織・芳賀奈月

### 1. テーマ 「食パワー」

#### 内容（大浦）

○子ども達に食の大切さをオリジナルストーリーにして伝える。

#### テーマについて

○なぜ、子ども達に食と体の大切さを伝えたいのか。

子どもにとって“食”とは、発育・発達の重要な時期にあり、栄養素摂取の偏り、朝食の欠食、小児期における肥満の増加、思春期における痩せの増加など、問題は多様化、深刻化し、生涯にわたる健康への影響が懸念されている。また食べることは生きるための基本であり、子どもの健やかな心と身体の発達に欠かせないものだ。「なにを」「どれだけ」食べるかということとともに、「いつ」「どこで」「誰と」「どのように」食べるかということが重要になる。これらのほどよいバランスが、心地よい食卓を作り出し、心の安定をもたらし、健康な食習慣の基礎になっていく。

食べ物を「食べる」→「体の中に入る」→「吸収する」→「エネルギーになる」→「消化する」→「便になる」という食べ物の流れと、どこで食べ物が消化されているのか色をつけた器官の絵で子どもたちが楽しく分かりやすく理解できるよう体博士と言う役をつくり、説明してもらおうようにした。実際にマユちゃんとキヨちゃんの朝食の様子を見せてお腹の満腹度を比べたり、給食を食べて二人とも元気になり体のエネルギーになるということを見てもらった。

私たちは、子どもたちが少しでも食べることに興味を持ち、食べるのが楽しいと思えるようにオリジナルストーリーを考え劇にした。

#### ○子どもに伝えた身体づくりについて

食道→口に入れた食べ物はこの食道を通して下にある胃に流れる。

胃→食道を通った食べ物は胃に流れていき、食べ物を溜める。消化で溜まった食べ物を溶かして柔らかくする。

腸→胃で柔らかくなった食べ物は腸に流れていき、小腸から大腸に流れていく。そこから、肛門に流れる。

肛門→食べ物の残った物や身体にとって不必要な物が大便（うんち）として出ていく。

#### ○給食について（～宅配給食と自園調理～）（芳賀）

『宅配給食』では、園によって異なるが、給食センターなどで調理されたご飯やおかず、フルーツなどが弁当箱などに詰められて園に届けられる。自園調理とは違い園における配膳

の手間が少なく、届いた弁当を子ども達に配るだけ（一部配膳の場合もある）なので、準備にかかる時間が少なく、子どもも保育者にもゆとりができる。また、個別のアレルギー対応では名前が書かれていたり弁当箱の色が変更されていたりするなど、間違えにくいメリットもある。一方で、汁物などは無かったり、調理から時間が経っている事により温かい、冷たいものが食べられない場合もある。

『自園調理』では、園内の調理室で調理をしているため、その園の子ども達の状況に合わせてメニューを工夫することができる。子供たちが園で育てた野菜を使い、給食として食べることで、苦手な野菜でも自分で育てた事により興味がわき、自主的に食べたいと思うようになるなどという事もある。

また、園によって異なるが、野菜の味をそのまま味わうために、ドレッシング等の調味料は使わず野菜を茹でたり、焼いた物を子ども達に食べてもらう園もある。

アレルギーの子どもに対しての細かい食事対応は、園内で調理をする施設でないと対応してもらえない場合もある。特に保育園等における未満児については、咀嚼など一人ひとりの発達段階に応じて細やかに対応できる点も自園調理ならではのメリットである。

※参考：実際の給食の内容例



①社会福祉法人 『さくらの園』



②なかよし給食（宅配）  
年少 黄色の弁当箱  
年中・年長 赤い弁当箱



③認定こども園 『ふたば幼稚園』（自園調理）

## 2. 作品の構成（木下、塚本）

### (1) オープニング

子どもが苦手意識のある、ピーマンを絵（キャラクター）で表し聞くだけでなく、見ても楽しめるようにした。もぐもぐ保育園の世界に子ども達が入り込めるよう、ナレーションを入れた。

### (2) 朝の場面

マユちゃんとキヨちゃんが朝起きて、園に行くまでの様子を表した。マユちゃんは、朝元気よく起きてきて、朝ごはんを余裕をもって食べることができるようにした。キヨちゃんは、朝起きるのが遅く、朝ごはんをたくさん食べる時間がなくて、元気がない様子を表した。

保育園の子ども達も参加してキヨちゃんを起こしてもらうように促した。

### (3) 保育園に向かう場面

背景を固定し、バスだけが動くようにした。ピアノで、バスが動く様子を表した。

### (4) 保育園の場面

・挨拶：保育室内に入り、保育者と挨拶をした。その際に、マユちゃんは見ている園児に向けても挨拶をし、元気な様子を表した。キヨちゃんは、元気が無い様子を声の小ささや行動で表した。

・朝の集まり：挨拶、名前呼びをし、「おはようのうた」を歌った。名前呼びの時に、キヨちゃんは返事を小さくしたり、名前を呼ばれても反応が遅くしたりして元気がない様子を表した。ピーマンが見ている子ども達にどうしてキヨちゃんが元気がないのかを聞いた。

・リトミック：とんぼのめがね、みつばちマーチをピアノで弾き、それに合わせて動いた。キヨちゃんは、途中から座り込んで動けない様子を表した。

・お昼ご飯：本物の食材を用意し、2人がおいしく食べる様子を表した。2人が食べる途中で、身体博士が登場し、体の仕組み（食道、胃、大腸、小腸）を見ている子ども達に分かりやすく伝えた。そして、食べ物が通るところをピタゴラ装置のようなもので表した。

### (5) エンディング

身体博士が食べることの大切さを見ている子ども達に分かりやすく伝えた。お昼ご飯を食べて元気になったキヨちゃんは友達と博士と一緒に遊んだ。

## 3. 台本作り（嶋田、古賀）

- ・オリジナルでストーリーを作る

### オープニング

ピーマンを画面に映して朝の雰囲気を出すようなピアノを弾きナレーションが簡単にどんな物語なのか伝える。

### 朝の場面

・マユちゃんは先に起きて朝の準備をする。キヨちゃんが起きてこないことにピーマンが気づいて、保育園の子たちの力をかりて起こす。

・キヨちゃんは急いで準備を行ったが時間がなく朝ご飯を残してしまう。

・2人はバスへ向かい、ピアノを弾き画面でバスを映して表す。

・朝ご飯後の2人のお腹の様子をメーターにして、朝ご飯をしっかり食べたマユちゃんのメーターは満腹になる。途中で残してしまったキヨちゃんはまゆちゃん比べて少ない。

## 保育園の場面

- ・保育者に子ども達が挨拶をする。保育者がキヨちゃんの元気の無い挨拶に対して反応をする。そこでマユちゃんキヨちゃんの他に園児A.Bが登場する。
- ・椅子を自分達で持って朝のお集まりを始める。
- ・園児1人ずつ名前を呼び元気よく手をあげ返事をする。キヨちゃんはお腹が空いているためぼーっとしている。
- ・他の園児がキヨちゃんに呼ばれていることを教えてあげる。
- ・ピーマンが保育園の子たちになぜ元気がないのか問いかけ一緒に考えてみる。
- ・おはようのうたを歌い椅子片付け朝のお集まりを終える。
- ・保育者が声を掛け、リトミックを始める。
- ・とんぼのめがねのピアノを弾き、トンボになりきり動く。
- ・ピアノのリズムや速度に合わせて、早く動き、止まる、ゆっくり動き、止まるといったリトミックをする。
- ・途中でキヨちゃんお腹が空いて座り込む。それに対して園児たちが声を掛ける。
- ・リトミックで体を動かした2人のお腹は空腹になっていることをメーターで表す。

## 給食

- ・給食の準備に取り掛かる。
- ・保育者の声掛けでいただきますをする。博士がいることに気づき博士を映す。
- ・博士が器官や臓器を子どもが分かるよう簡単に説明する。子どもたちにも器官や臓器を触って自分にもあるという認識をする。
- ・たまねぎ、にんじん、ブロッコリー、お肉、いりこ、白米、お味噌汁(味噌)の食べた瞬間に画面を切り替え、お腹の中を表現した作品で表す。
- ・食べ物が流れていく際にピアノで流れを表現する。
- ・最終的にお腹の中に溜まっていくようする。
- ・博士が、食べることの大切さを伝える。
- ・キヨちゃんが博士をタッチして、他の子ども達と一緒に遊ぶ。
- ・ピーマンの言葉の後、キヨちゃんが園の子ども達に強い体になろうと声掛けする。
- ・博士、キヨちゃん、マユちゃん、その他の子どもが強くなった体の表現をする。
- ・皆んなでさよならをする。

## 4. カメラ (川上、大浦)

### (1)メリット

- ・ズームをすることで一人ひとりの表情が分かりやすくする。
- ・細かい動きも表現することができる。
- ・大きい音から小さい音まで拾うことができる。
- ・子どもとやり取りができリアルな反応を見られる。
- ・準備、片付けが見えないためストーリー性がある。
- ・道具の移動が少ないため、少人数で行える。
- ・小道具が実物大で表すことができる。
- ・見られている感覚が少なく、普段通りの姿を見せることができる。

### (2)デメリット

- ・操作が難しく、間違えると全体の流れも崩れてしまう。
- ・カメラを使っでの練習が必要。
- ・通信状況が悪いと音声や画像に乱れが生じる事がある。
- ・スマートフォン等から流した音など小さな音はノイズと判断され消されてしまう。

- ・同じ場所でしかできないため背景の工夫が必要。
- ・カメラではなく、モニターを意識しすぎてしまい視線が相手に届かない。
- ・アップをすると顔の表情は見えやすくなるが、手振り身振りまで見えない。
- ・撮影状況によっては顔が見えにくい。
- ・子どもの反応が分かりづらい。

### 工夫したこと

- ・背景と服装が同化しないようにした。
- ・少しの雑音でも拾うため音には細心の注意をした。
- ・カメラの位置を各場面で固定して調整を少なくする。
- ・台本にカメラの切り替え番号を記入する。
- ・背景が変わらないため黒板に書き園の雰囲気を出す。

### カメラを担当した感想

遊びと表現発表会は毎年、大谷講堂の舞台の上でクラスごとに自分たちで1から考えて取り組むとても大きな行事だと思っていた。私たちが1年生の時、先輩方発表をしましたが、練習、小道具作り、舞台のスタッフさんたちとの打ち合わせなど、近くで見せていただき学んだ。

新型コロナウイルスの感染拡大のため、昨年までの遊びと表現発表会のやり方と異なり、リモートでの発表となった。カメラを使っての撮影になり、誰もが初めてのことで準備時からたくさんトラブルが起きた。カメラの台数が少なく、次に映したいものを映す準備が遅くなったり、マイクがどの音を一番大きく拾うのかその場で分からず、リモートでつないでみないとわからなかったりした。カメラ操作では、角度や向き、上下のバランス、拡大縮小のタイミング、画面の切り替え、背景の問題など何度も練習をした。自分たちが練習する時、すぐにカメラを使えるわけではなかったため、少し不安もあり本番に挑んだ。

本番は大きなミスもなく、練習通り進めることができた。いつもと同じ遊びと表現発表会はできず、「幼教子ども劇場」というリモートでの発表となかったが、カメラを使った発表でしか得ることのできない達成感を味わうことができた。カメラを使うことで細かい動きが見えやすく、小道具が実物大でもわかるようになり、舞台上で一人一人の表情を見ることは難しいが、カメラをズームすることでよく見えるようになった。

そして、発表中に子どもとのやり取りができ、リアクションを見ながら発表をして子どもたちが楽しんで見てくれているということを感じた。カメラを操作していた為、実際に画面に映ることはなかったが、「裏方」という仕事の大切さに気づくことができた。

## 5. 制作過程

### (1) 目標、課題

- ・学校にあるものを使って、予算内におさめる。
- ・カメラにはっきりと映るように物を大きめに作る。
- ・一人一人の違いを表すために、洋服の色や髪型、小物の色を変える。

#### 【ピーマンくん】(猿渡)

ナレーションを声だけ行った時に分かりづらく、被ってしまうことがあったため、分かりやすくするために子どもが苦手意識のあるピーマンを選び厚紙にピーマンの絵を描き、動かしやすいように木の棒を付け、背景にはグレーの色紙を使用し、ピーマンくんが見えやすいように制作した。ピーマンくんという



キャラクターが出てくることで、子どもの集中を引き寄せるように制作した。子どもたちが親しみやすいように顔を書き可愛さを重視した。

### 【紙粘土の朝食】(青木)



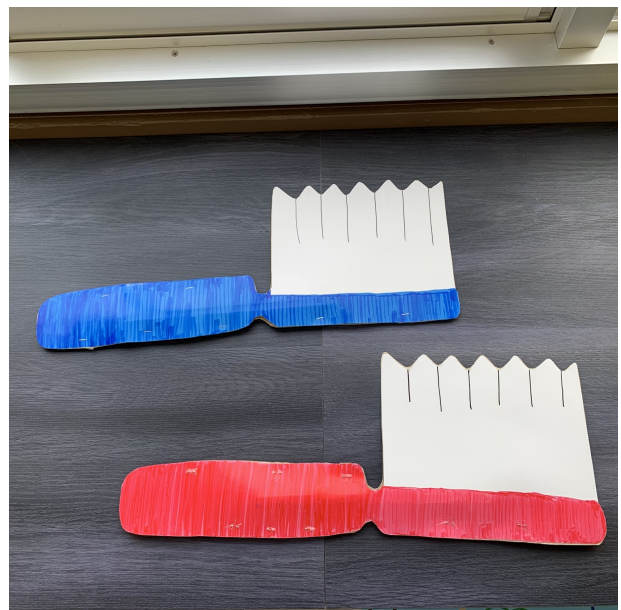
朝ごはんを食べるシーンで食べ物がカメラに映るようにするため、立体的な食べ物を作るように工夫した。紙粘土を使いおにぎりや玉子、トマト等の形を作り、色を塗る。お皿も食べ物が映るように平らなお皿を用意した。朝ごはんを全て食べ終わるために、お皿の上に食べ物の絵を描き立てて置く。食べたと同時に皿に立てて置いた絵を倒していく。また全て食べ終わってない状態を表すため、おにぎりを途中まで食べている様子を紙粘土で表現する。

### 【歯ブラシ】(猿渡)

カメラで全体を写しているため、普段使用している歯ブラシを使うと見えやすく、歯磨きをしている動作が小さく見えてしまうので、どんなことをしているのかオンラインで見ている子どもたちが分かりやすく、見えやすいようにした。

歯ブラシを制作する際に厚紙に歯ブラシの絵を描いて使用したが、厚紙だけでは弱く、上手くカメラに写らないため厚紙の裏面に木の棒を貼り、裏表にも絵を描き貼り合わせ、頑丈になるよう補強し、大きく制作した。

そして、歯磨きをする動作も大きくし、上下の歯を磨いているようにした。また、まゆちゃんときよちゃんの家が違うことを子どもたちに伝えるために、歯ブラシの色も赤色と青色にして分かりやすくした。



### 【カバン】(猿渡)

登園の際に使用したカバンは、(写真④)で制作した際に余ったダンボールを使って子どもたちが使用しているようなカバンを考え、色や形にこだわり制作した。普通の長方形ではなく、台形にし立体的に見せて鈴蘭テープで紐をつけ、それぞれ使用する人に合わせた長さを調整出来るようにした。あまり目立つ小道具ではないが、カバンを使用することでより園児として成り立つと考えた。



### 【お腹の中メーター】(伊崎)

お腹の中メーターができた経緯は、作中に登場するキヨちゃんとマユちゃんの空腹、満腹を表すために作られたものである。

作る過程で大きな課題になったのは空腹と満腹を造形物で表現しにくい所だった。その造形物を作るにあたり、画用紙などの紙で表現する事を決め、試行錯誤を重ねた結果〇図のような形になった。

赤い紙の上から橙色の丸く切った紙を貼り、切込みを入れ、後ろから同じ大きさの丸い青い紙を差し込むことで、青色が空腹、橙色が満腹を表現した。

工夫した所は、橙色の紙に食べ物と元気が出ている女の子を描く事で、園児でも橙色が満腹を表すことだと理解しやすいようにした事である。



### 【バス】(青木)

今回はステージではなくカメラを通しての発表なので大きい背景は準備せず、カメラでしか表現出来ない遠近法を使った。白画用紙に並木町と道路を描く。バスは同じ画用紙に描くと静止画になり動きがないため、別の画用紙に準備する。並木町と道路を描いた画用紙に1つ波の穴を開ける。その画用紙を挟むようにバスと割り箸を付ける。後ろの割り箸を持ちバスを動かすことで進んでいる、動いている様子を表現した。



### 【博士の棒】 (伊崎)

博士の棒は元々、先端に赤い矢印がついた棒だった。中間発表の際はその棒で行ったが、博士の身体の中を通る食べ物の説明の中で、腸で食べ物が便になるという文がある。その文があるなら先生から矢印の裏表に食べ物と便のイラストを描き、身体の中の説明に合わせて裏表を変えるとわかりやすいとアドバイスを受けた。なので表はおにぎり、裏は便のイラスト描いた物を先端にし、それが本番でも使われる博士の棒となった。博士の棒で悩んだ点は、元々は先端は矢印だったため、身体の中を通る場所を示しやすかったのが、変更後おにぎりになったため、身体の中を通る食べ物の場所を的確に伝える事が難しくなったのが悩んだ点である。

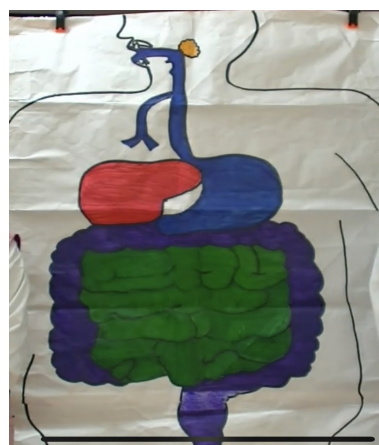


### 【食べ物を通る道】 (友清)

始めは透明の太い筒の中に色がついたボールを入れて転がし、食べ物が体を通る様子を表そうとしたが、オンラインで見ている園児たちに伝わりにくいのではないかと思い、別の方法を考えた。そして思いついたのが、傾斜をつけた棒の上にそれぞれの食べ物の絵がついた丸いダンボールを転がすという考えだった。これは、NHKの番組「ピラゴラスイッチ」を参考にして考えたものである。また、食べ物が身体の中を通っていることを伝えなかったため、身体の中の絵を背景にして(写真①)制作した。これらの作品は全て大学にある物を使い、ダンボールは他の制作物で余ったダンボールを使用した。勢いがつきすぎると丸い食べ物のダンボールが落下してしまうため、棒の傾きや滑り具合を調節する作業が大変だった。



(写真①)



(写真②)

### 【身体の平面図】 (友清)

これは博士が身体の中を説明する時に使用したものである。模造紙に身体の中の絵を描き、臓器に色をつけて分かりやすく表した。(写真②)

体の平面図を描くうえで、工夫した点は園児にもわかりやすい臓器の形を描くために、臓器が説明されている本を見ながら大きく、なおかつバランスよく描く事を意識した。画面越しでも見やすいようにしたのそも工夫した点である。



食べ物が通る道、身体の平面図：どうなってるの？からだのなか 文/ケイティ・デインズ  
絵/コリン・キング 訳/福本友美子 参照

## 6. 子どもたちの予想外の反応・子どもの反応の分析（中川）

・導入の場面では、子どもたちに今日の朝ごはんは食べてきたのか聞き「おべんとうばこのうた」の手遊びを行う。子どもたちは「おべんとうばこのうた」に親しみがあり、声を掛けるとすぐに反応があり一緒にしてくれると思っていた。だが、初めは戸惑いや緊張があったのか反応が薄く感じた。その場にいる保育者が一緒に行っているのを見て徐々に一緒に行った。一人の子が手遊びを始めると周りの子どもたちも真似をしている。子どもたちも参加したい、やりたいと思える。それからリモートでやり取りができるということを理解して、反応が良くなったように感じた。

・キヨちゃんを起こす場面では、子どもたちに協力してもらおうよう声を掛けた。起こしてもらおうように伝えると恥ずかしがる子や隣の子と嬉しそうにしている姿が見られた。1回目は「せーの」と声を掛けることで、一斉に言うことができていた。2回目はナレーションの「もう一度起こしてみよう、せーの」と言う声掛けで合わせる予定だったが、子どもたちの気持ちが早まり先に言ってしまい、ナレーションと声がかぶる部分があった。キヨちゃんが起きナレーションが保育園の子どもたちにお礼を言うと「どういたしまして」と言う声も聞こえる。

・朝ご飯の場面で、画用紙で作った歯ブラシを出すと「でかつ」と言う声と笑い声があった。

・バスに向かう際にキヨちゃんが腰を曲げるような素振りや「いってきます」をするとそれをみると一緒お辞儀をする。

・保育園に着き保育者と挨拶をする場面で、マユちゃんがカメラに向かい手を振りながら挨拶をすると、元気よく手を振り挨拶を返してくれた。保育者が園児に挨拶をしていくと一緒に合わせてお辞儀をする。

・子どもたちにキヨちゃんが元気の無い理由を聞いてみると、初めは分からないという声が多かったが、数人が「ご飯を食べていないから」と口に出した。その為内容を理解しているように感じた。

・リトミックの場面で、知っている曲だと一緒に歌いリズムに乗っていた。

・博士が身体の仕組みについて聞くと、知らないと言う反応があった。説明をして各器官の場所を触ってみるよう声を掛けると、分からない子どもでも顔を見合わせながら触って確認を行っていた。最後に理解したのか聞いてみると、元気よく手を挙げる。しかし、保育者が先に反応をした為子どもたちは反応がしやすいが返事をしていたように感じた。

・給食の場面で、食べ物が通る様子を見せると初めは反応が薄かった。大きい食べ物のイラストから小さい転がるイラストに変わると、大きさの違いに反応があった。転がることに対する反応があまりなかったように感じた。キヨちゃんとマユちゃんに合わせてごちそうさまを行う。

・エンディングで「強い身体になろう」と伝えると真似をして「なろう」と声を出す。力強いポーズをすると子どもたちが「マッチョ」と笑いながら反応していた。

・フェードアウトした後も手を振り続ける様子が見られる。

・再度出てくると、より大きく手を振りかえしていた。

## 7. 役割分担

ナレーション：嶋田香凜

キヨちゃん：友清カレン

マユちゃん：青木真郁

園児A：古賀葉月

園児B：猿渡愛華  
保育者：塚本萌杏  
身体博士：伊崎大雅  
博士助手：芳賀奈月  
ピアノ：木下  
カメラ：大浦佐知 川上莉奈  
小道具担当：中川沙織

## 8. 感想

青木真郁

発表会を通して、幼児期は食べ物の好き嫌いも多く好きなおやつ等偏食もあるため、幼児期に好き嫌いがなくしっかりご飯を食べることで自身の体がどれくらい強く、健康になるかを伝えたいと思い、テーマ「食パワー」になった。テーマが決まり役割分担をしてから劇の中で出てくる人物に決まり、しっかりご飯を食べて元気な様子や表情をどうやって子どもたちに伝える考えることが出来た。朝ごはんを食べるシーンでは紙粘土で作ったご飯を全て食べるのでお皿の上には何も残っていない状態を表さないといけないのでどうやって紙粘土のご飯をなくすか考えた。同時に朝ごはんや移動するバスの作成など道具の準備も行った。今回はステージでの発表ではなくカメラを使っての発表会だったので、遠近法を使って背景や制作物をうまく表現できたので楽しかった。直接子どもたちを見れなかったがリモートを通して反応してくれる様子が見れて良かった。

伊崎大雅

今回の幼教こども劇場では博士役を演じた。私の中で課題になったのは、身体の中の構造や説明を園児にもわかりやすく理解してもらえるような文を考えるという事である。園児はまだ身体の中の事をあまり理解していないと思うため、最初に食道や胃などの場所の名前を伝え、その機能を伝えたくて、リモートで園児たちにも実際にある場所を触ってもらう。その確認を行うことで園児たちの頭の中に名前と機能、場所がより理解できるようになると考えたからである。セリフなども柔らかい言い回しにし、早口にならないようにゆっくり伝える事を意識した。

他に、博士らしい格好をするために博士服を用意する必要があったが経費が足りなかった。なのでレインコートを買って、加工をして博士の服に見えるようにし、博士の服として使用した。髪型も普通の髪型では、博士要素が少ないと話し合いできまり、アフロのカツラを着用し、園児に博士だと認識してもらるようにした。

猿渡愛華

発表会を通して初めてカメラワークでの発表で、分からないことが沢山あり、子どもたちに分かりやすく食について伝えるにはどうしたらいいのかを考えると苦労した。体の仕組みや食についてのストーリーを体内の平面図や絵本などからピックアップし子どもたちに伝えたい部分を考え、話し合いを行い台本を進める中で、様々な困難があった。

しかし、一人一人が案を出し、積極的に行動することが出来たため、速やかに台本を完成させ、セリフや動きの練習時間や変更、改善点の見直しなどの時間を多くとることができ、より良い作品を作り上げることが出来た。制作を担当した際に子どもが見えやすいように作るには大きめに作ったり、色をはっきりと分かるようにしたり、ダンボールの余りや厚紙の残りなど身近なものを使用し、経費削減を意識しながら制作した。あまり目立たない小道具も

あったが、制作することでより園児になりきり、園での生活用品として活用することが出来た。また、オンラインでの発表のため、役を演じている際は子どもの反応を見ることがあまり出来なかったが、子どもの集中力を引きつけるためにも子どもと受け答えをしたり、ゆっくり分かりやすく話すことが大事だと学ぶことが出来た。カメラワークを活用して発表を行うという経験ができ、新しい知識として今後活用出来るようにしたいと思った。

#### 友清カレン

今回の幼教こども劇場は、初めてのリモートでの発表で、大変なことや分からないことなど沢山ありましたが、無事成功させることができた。まず練習の際には、カメラの画角や位置を合わせるのが難しく、メーターやバスで苦戦している場面がよく見られた。そこを何回も練習して上達し、本番で成功させることができた。また、オンラインで劇を見ている園児たちに伝わりやすいように動きや小物を大きくしたり、聞こえやすいように声のボリュームや話す速さを調節したりして発表会に臨んだ。本番当日は、劇をスムーズに進めることができ、大きな失敗もなく発表を終えることができた。園児たちの反応もとても良く、学生の問いかけに対しても沢山答えてくれたので、本当に嬉しく思った。初めてのリモート発表だったので、不安な気持ちでいっぱいだったが、精一杯の発表ができたので本当に良かった。お疲れ様でした。

#### 【まとめ】

今回の幼教こども劇場は、初めてのリモートでの発表で、大変なことや分からないことなど沢山あったが、子どもたちに分かりやすく食について伝えるにはどうしたらいいのか考え、無事成功させることができた。

幼児期は食べ物の好き嫌いも多く好きなおやつ等偏食もあるため、幼児期に好き嫌いなくしっかりご飯を食べることで自身の体がどれくらい強く、健康になるかを伝えたいと思い、テーマ「食パワー」にした。また、体の仕組みや食についてのストーリーを体内の平面図や絵本などからピックアップし子どもたちに伝えたい部分を考え、話し合いを行った。その中で様々な苦労もあったが、一人一人が案を出し、積極的に行動することが出来たため、速やかに台本を完成させ、セリフや動きの練習時間や変更、改善点の見直しなどの時間を多くとることができ、より良い作品を作り上げることが出来た。

制作では、子どもが見えやすいように大きめに作ったり、色をはっきりと分かるようにしたり、ダンボールの余りや厚紙の残りなど身近なものを使用し、経費削減を意識しながら制作した。遠近法を使って背景や制作物を見せて表現するのは難しかったが、みんなで試行錯誤し、改良を行った。

博士の役において、課題になったのは、身体の中の構造や説明を園児にもわかりやすく理解してもらえそうな文を考えるという事である。園児はまだ身体の中の事をあまり理解していないと思うため、最初に食道や胃などの場所の名前を伝え、その機能を伝えたいうえで、リモートで園児たちにも実際にある場所を触ってもらった。その確認を行うことで園児たちの頭の中に名前と機能、場所がより理解できるようになると考えた。

本番当日は、劇をスムーズに進めることができた。大きな失敗もなく発表を終えることができた。直接子どもたちを見れなかったがリモートを通して反応してくれる様子が見れて良かった。カメラワークを活用して発表を行うという経験ができ、新しい知識として今後活用出来るようにしたいと思った。また、子どもの集中力を引きつけるためにも子どもと受け答えをしたり、ゆっくり分かりやすく話すことが大事だと学ぶことが出来た。初めてのリモート発表だったので、不安な気持ちでいっぱいだったが、精一杯の発表ができて本当に良かったと思う。